芸術の世界から見た「水」の風景（第一回）

大橋欣治

はじめに

最近、アメリカの無人火星探査機が、火星表面に降り立つことに成功し、地形や土質・地質の探査を開始し、続々と観測データが送られてきている。それによると、「水」が流れてできた地形や、火表下には明らかに「水」が存在していることを証明するデータがあるという。「水」が存在することは、生物が生存している可能性が高い。かつて、火星には運河のようなものがあったのではないかとか、「火星人」がいるのではないかとか、様々な想像がなされてきた。「火星人」とまではいかないとしても、なんらかの生物が存在していることになれば、大変な発見になる。宇宙では、太陽系はちっぽけな存在らしい。従って、宇宙には、地球以上に生物が多様で、人間以上に高度な知能を持った生物が存在する星があっても不思議ではないという。

いずれにしろ、「水」が生物の発生や存在に欠かせないことは事実である。同時に、「水」は単に「命の水」だけではなく、人間にとっては、「癒しの水」であり、「輪廻の水」であり、「清めの水」であり、精神の世界にとっても様々な意味合いを持つ存在である。また、「水」の存在も、「海の水」であったり、「川の水」であったり、「湖・池・沼の水」であったり、「地下の水」であったり、時には「滝の水」であったり、実に様々な場所に存在している。さらに、「雲」であったり、「雨」であったり、「氷」であったり、水の姿は様々に変化する。

このように、「水」は、人間にとって余りにも身近な存在であるが故に、古今東西の様々な人々が、文学・美術・音楽・演劇などのいわゆる芸術の題材や背景にしてきた。そこには、「人間と水」の切り離せない関係があるからである。同時に、このようなテーマの探究は、永遠に興味が尽きない。

筆者は、「水」に関係する学問を学び、長く「水」に関係する仕事をしてきた。そんなことから、筆者なりに水にまつわる芸術作品を選定し、「水」の精神・思想・文化について、その作品から見た水の風景を通じたアプローチを試みた。これらの作品は、あくまで筆者が選定したものであり、また、その解釈を試みたものであり、大事な見落としや間違いがあることをお許し願いたい。

筆者は、かつて、「日本文学と水についての点描」農業土木事業協会会誌34号（１９８７）を発表したことがある。それも一部取り込んで、拙著『水の賦―水についての雑記帳―』全国農

業土木技術連盟（現全国農村振興技術連盟）（1991）を出版したことがある。今回は、それらを発展させて、日本文学に限定せず、世界の文学、音楽、芸術等まで拡げて考察したいと考えている。なお、筆者は、本誌に、もう一つの専門である「土」について、「芸術から見た「土」の思想」土地改良建設協会機関誌『土地改良』261～268号（全8回）（2008～2010）に連載する機会を与えられた。この連載の内容は、拙著『土の魂―土に関するフォークロア―』土地改良新聞社（2000）に活かさせていただいた。まさに、今回の「水」の風景は、この「土」の思想の姉妹品である。

§序　章　歌舞伎『鳴神』（『雷神不動北山桜』）

日本の伝統文化、伝統芸術の一つに、「歌舞伎」がある。その語源は、「傾く（かたむく）」の古語に当る「傾く（かぶく）」を名詞化した「かぶき」だといわれている。戦国時代末期（16世紀末期）から江戸時代初頭（17世紀初頭）に流行した派手な衣装や一風変わった異形を好んだり、常軌を逸脱したりする行動に走ることを指した語で、そうした者たちを「かぶき者」とも言った。このような「かぶき者」の斬新な動きや派手な装いを取り入れた独特な「かぶき踊り」が京・江戸で流行った。その先駆が慶長年間（17世紀初頭前後）の「出雲阿国（いずもおくに）」であった。その後阿国を模倣した様々な踊りが世に出た。この「かぶき」に「歌い舞う芸妓」の意から「歌舞妓」といわれたが、寛永6年（1629）に女歌舞妓が禁止され、「歌舞妓」となったといわれている。以来、時代の盛衰があったものの人気役者などが輩出し、庶民を含めて人気が高く今日までに至っている。

歌舞伎18番『鳴神』、鳴神上人（中村橋之助）と雲の絶間姫（中村扇雀）
（出典：『名作歌舞伎五〇』）

この歌舞伎十八番（1）の一つに、『鳴神（なるかみ）』正式には『雷神不動北山桜（なるかみふどうきたやまざくら）』がある。

そのあらすじは、次のようである。平安時代、陽成天皇の頃、世継ぎのない天皇は、鳴神上人に寺院建立を約束に皇子誕生の願を依頼する。鳴神上人は、帝の願いを受け入れ祈祷し見事に皇子誕生を成就させた。しかし、当の天皇は、寺院建立の約束を反故（ほご）にしたため、怒った鳴神上人は、呪術（じゅじゅつ）を用いて雨を降らす三千世界の竜神を北山の滝壺に閉じ込め、黒雲坊、白雲坊を従えて、護摩の岩屋にこもってしまった。そのため3カ月もの間、雨が降らず、国中が干ばつに襲われ、民百姓は苦しんでいた。そこで、朝廷は、女色を持って上人の呪術を破ろうと、雲（くも）の絶間姫（たえまひめ）という洛中一の美女を上人の許（もと）に送り込む。

北山の鳴神上人の庵に、一人の美しい女（雲の絶間姫）がやってくる。不信を抱いた上人は、女に事情を訪ねる。女は夫を亡くしたばかりの未亡人だが、日照りで水がないため、水の枯れないこの北山の滝へその衣を洗いにきたと話す。上人に問われるままに亡き夫との馴れ初めを、女が面白おかしく話をしていると、話に聞き入っていた上人が、壇上から転げ落ちて気絶してしまう。そこで、女は滝の水を汲んで口移しに上人に飲ませ、胸をさすって介抱する。

気が付いた上人は、一角仙人（2）が通力を失った故事を思い出し、女の意図を疑い怪しむ。疑われたと知った女は、滝壺に飛び込んで死のうとするが、すぐに疑いを晴らした上人は、弟子たちに女が飛び込むのを止めさせる。そして、剃髪（ていはつ）し尼になって自分の弟子になるようにいい、二人の弟子に麓まで剃刀（ていとう）を買いに行かせる。

二人だけになると、女は待っていたように突

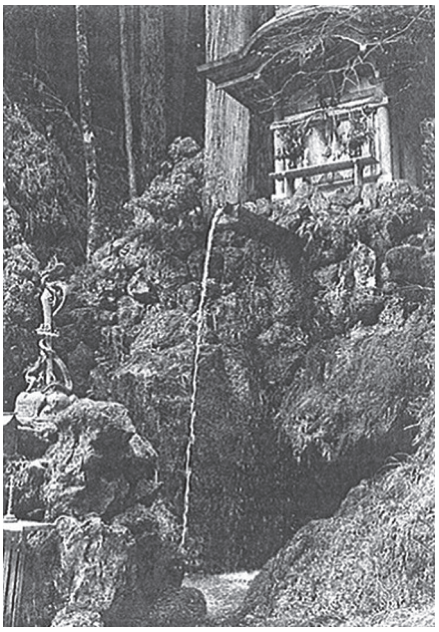
然癪で苦しみだす。上人は、「自分の手には病気を治す力がある」といって女の懐に手を入れる。女の胸に初めて手を触れた上人は、徐々に本能に目覚め「自分は教えを捨て還俗しても構わないから妻になれ」と女を脅しにかかる。初めにうち怯えていた女は急に手のひらを返したように、妻になることを承知する。そして、祝言の杯ごとをしようと上人に酒を飲ませる。上人が酒を飲んだ瞬間、祭壇の掛け軸が焼け落ちる。

　生れて初めて酒を飲んだ上人は、見る見るうちに酔いつぶれてしまう。その時、女が滝壺に掛かっている注連縄の由来を尋ねる。上人は竜神を閉じ込めていることを話し、他言はするなと約束させる。そうしている内に、上人はぐっすり寝込んでしまう。すると、女は、自分が帝の命令で滝壺の竜神を解き放ちにきた雲の絶間姫であることを思い出し、鳴神上人を心ならずも騙さなければいけなかったことをわび、滝壺の注連縄を切る。すると竜神は飛び去り、雷鳴がとどろき、雨が沛然と降ってくる。そして、雲の絶間姫は麓へと逃げ去る。雨の音に飛び起きた上人は、自分が騙されたことに気づき、烈火のごとく怒り、髪は逆立ち、着ている物は炎となって、女（姫）を逃さじと、その後を追いかける。

　このように、物語は、「鳴神上人」という雷鳴＝雨・水を司る神を、「雲の絶間姫」という雲＝雨の素を絶やさないことを連想させる名前が使われている。また、このような物語が出来上がった背景には、しばしば洪水とともに干ばつに悩まされてきた民百姓が多かったことを表わしている。朝廷としても、農作物の不作は税の不足につながることであり、絶えず五穀豊穣や雨乞いの祈祷を行っていた。この「鳴神」が歌舞伎十八番として演じられる魅力は、鳴神上人が絶世の美女・雲の絶間姫の色仕掛けに神通力を失うという、神といえども女の力（色香）にはかなわないという人間の性や弱さを見事に表現しているところにある。

　この「鳴神上人」が、竜神を閉じ込めたといわれる岩屋は、京都・鴨川の本流の水源地に当る『岩屋山・志明院』（京都市北区雲ヶ畑）にある。志明院は、同じ鴨川水系の水源地である鞍馬の鞍馬寺・貴船神社、大原の三千院・寂光院など（これらは鴨川の支流・高野川水系にある）に比べて訪問者も少なく、静かな佇まいで

岩屋山・志明院
（撮影：筆者）



飛龍の滝（志明院）
（出典：「志明院パンフレット」）

護摩の岩屋（鳴神の岩屋、志明院）
（出典：『水かがみ』）

あり、現代風にいえば霊気を感じるスポット（聖域）である。当山は、650年に役の行者が草創したといわれている。829年に弘法大師が再興し、本尊不動明王は弘法大師の直作と伝えられている。根本中院本尊眼力不道明王は菅原道真作といわれている。鴨川の水源地であることから、皇室の崇敬が厚かった。院内には、「飛龍の滝」があり、弘法大師の三密の秘法を修し、一顆の玉を授けると忽ち化して竜となり滝に入る。浴すれば心願成就するといわれ、鳴神上人の行場でもあった。「護摩の岩屋」は、役の行者、弘法大師などの行法の跡で、鳴神上人も護摩行のために籠ったといわれている。

京に都が置かれて、1200年余が経つが、東西および北に山を控え、東に鴨川、西に桂川が流下し、南面に拓けている絶好な土地柄である。平安時代末期に絶大な権力を誇った後白河法皇は、「加茂川の水、双六の賽、山法師」を天下三大不如意といって、自分の意のままにならないものとした。この加茂川（鴨川）の水は、しばしば洪水を引き起こし、京の都や田畑に甚大な被害をもたらしたと解釈されている。しかし、同時にしばしば干ばつにも見舞われ、京の人々の生活に深く影響を与えたり、農作物の凶作に苦しんだりした。このため、朝廷は、干ばつの時には、雨が降るよう加持祈祷をしばしば行っている。

江戸時代後期の読本作家・滝沢馬琴は、「京に良きもの三つ、女子、加茂の水、社寺」といっている。戦国時代以前に書かれたといわれる『人国記』では、冒頭に山城国（京都府の東南部）を取り上げ、「世俗に、その国風はその水を以て知ると云ふこと誠なるか。城州（山城国）はその水潔うして、万色を染むるに、その色余国にはるばる違へること、古より今に至るまでかくの如し。人の膚の滑らかなること亦これかくの如し。女の姿、音声の尋常なること並ぶ国なし」といっている。この水は、特に加茂川（鴨川）を指している。「京は加茂の水」なのである。

（注）
（1）歌舞伎十八番：江戸時代の天保年間（概ね1830年代）に、七代目市川団十郎が市川宗家のお家芸として選定した十八番の演目。
（2）一角仙人：天竺（インド）の説話で、日本の『太平記』『今昔物語集』に紹介されている。能楽にも『一角仙人』という題目があり、これは『太平記』の話を基にしているといわれている。雌鹿の腹から生まれ一本の角を持つ一角仙人が、ある日大雨で足を滑らせ、山から転落してしまったことに腹を立て、雨を降らせる竜王たちを洞窟に押し込めてしまう。雨が降らなくなり国中が困窮するので、国王は後宮一番の美女扇陀女に500人の美女を供につけ、酒や媚薬まで持たせ仙人のもとに送り込む。すっかり舞い上がった仙人が、扇陀女に手をだしたところで神通力は失せ、竜王たちが飛び出し、仙人は倒れ伏してしまい、雨が降り始めたという物語である。また、『今昔物語集』には、この一角仙人の話とともに、修行して飛行する術を会得した久米の仙人が、白い脛もあらわに洗濯する女に空中から見て目がくらみ、墜落してしまう話が収録されている。

（引用参考文献）
・郡司正勝校注：『歌舞伎十八番集』日本古典文学体系九八、岩波書店（1965）
・文・岡部伊都子／写真・井上博道：『水かがみ』、淡交社（1968）
・利根川裕著：『名作歌舞伎五〇』、世界文化社（2008）
・『鳴神』、フリー百科事典『ウィキペディア』（以下ウィキペディア）

§第2章 文学と水

1 日本文学・一〇選

（1）『古事記』

日本の『古事記』を文学作品とすることに対して、異論は沢山あることは承知している。『古事記』は、元明天皇の命で、稗田阿礼が伝誦した神代から推古天皇までの伝承したものを、太安萬侶が筆録し、712年に完成したものである。三巻からなり、上巻は神代の物語、中・下巻は天皇の物語となっている。一方、その後の720年に完成した『日本書紀』については、舎人親王（天武天皇の第三皇子）・太安萬侶らが編纂した官撰正史の意味合いが強い。そんな

ことから、『古事記』を文学書として読むと、実に面白い。「天照大神と須佐之男命」「大国主神」「天孫降臨」「海幸彦と山幸彦」「神武天皇の東征」「倭建命」等々の物語は、波乱に富んだストーリーであるとともに、神話といっても実に人間そのものの心象を表している。また、全編を通して、「**水界**」が舞台になっていることに大きな特色がある。

そもそも、日本国土の成り立ちの基礎を作ったのは、天つ神が、伊邪那岐命と伊邪那美命の二柱の神に、「この漂へる国を修め理り固め成せ」と命じて、天の沼矛を与えたことに始まる。この二柱の神が沼矛でもって、海水を攪き鳴らして引き上げる時、その矛の末より垂れ落ちた塩が重なり積もって島となった。これが淤能碁呂島であった。そこで、二柱の神は、この島に天降りして、伊邪那美命の「成り成りて成り合はざる処一処」と伊邪那岐命の「成り成りて成り余れる処一処」をまぐはいして国土を生み成さんとした。天の御柱を、伊邪那岐命が左から廻り、伊邪那美命が右から廻って、行き合ったところでまぐはいをすることとした。ところが、行き合ったところで、伊邪那美命が先に「あなにやし、えをとこを」と言い、後で伊邪那岐命が「あなにやし、えをとめを」と言ってまぐはいをした。その結果、水蛭子や淡島のような子しか生まれなかった。二柱の神は、天の神に相談したところ、女が先に言うことが良くないと言われた。(1) 二柱の神は、言われたようにした結果、淡路島を先ず初めとして、数々の国を生み、大八島国を生成した。さらに、国を生み終えた後で、神々を生成した。このように、日本の国土と神々は、「水界」を舞台として生成された。

伊邪那美命は、次々に神を生んだが、火の神を生んだ時に、遂にそれが原で亡くなってしまった。愛する妻に先立たれた伊邪那岐命は、黄泉の国に会いに行くが、そこで覗いてはいけないと言われた妻の姿を覗いてしまう。(2) それは蛆虫にたかられている醜い妻の姿であった。約束を破られて恥ずかしい姿を見られた伊邪那美命は、醜女や雷神に夫を追わせる。黄泉比良坂（黄泉の国と現実の世界の境）までたどり着き、桃の実3個を取って投げつけると、悉 逃げ帰った。ここに、伊邪那岐命はその桃の実に「汝、吾を助けしが如く、葦原中国にあらゆる現しき青人草の、苦しき瀬に落ちて患い悩む時、助くべし」と言った。最後に、伊邪那美命が追ってきたが、千引の石で塞いで防戦した。この時、伊邪那美命は「愛しき我が汝夫の命、かく為ば、汝の国の人草、一日に千頭絞り殺さん」と言った。ここに、伊邪那岐命は「愛しき我が汝妹の命、汝然為ば、吾一日に千五百の産屋立てん」と答えた。ここには、愛し合う夫婦の姿が描かれている。また、これによって、一日1000人死に、一日1500人が生まれるようになったという。同時に、ここで、「葦原中国にあらゆる現しき青人草」という言葉が出てくる。この青人草こそ、葦原が生い茂る日本国において、青草のように生々とした人の誕生という説がある。また、桃の実は、邪を払う威力を持っていることは、童話「桃太郎」の謂れにつながるものである。

上立神岩（沼島の東海岸にあり、2柱がこの岩を回って契りを交わした：兵庫県南淡町）

（出典：『古事記を旅する』）

イザナギとイザナミの像（おのころ神社（沼島）：兵庫県南淡町）

（出典：『古事記を旅する』）

伊邪那岐命は、穢い国にいたことから、「吾は御身の禊為む」と言って禊ぎ祓った。この水で身を清める儀礼は、神社にお参りする時に手水で口を濯いだり、手を洗ったりしてから神に祈ることや、新年に海水や井戸水で身を清めるなどの習慣が、今日まで綿々と続いている。そして、伊邪那岐命は、沢山の神々を生成したが、左目を洗った時に天照大御神（日の神）を、右目を洗った時に月読命（月の神）、鼻を洗った時に建速須佐之男命（勇猛迅速に荒れすさぶ男神）を成した。

須佐之男命は、天照大御神の田圃の畦を壊したり、溝を埋めたり、新穀を召し上がる祭殿に屎を撒き散らしたりの乱暴狼藉を繰り返した。見かねた天照大御神は、天の岩屋戸に籠ってしまうと、葦原中国は真っ暗闇になってしまった。困った八百万の神々は、色々と天照大御神の関心を引くようなことを試みるが、すべて失敗してしまう。天宇受賣命が裸踊りをし、神々が笑い合っているのを聞きつけて、天照大御神は天の岩屋戸を開くと、高天の原も葦原中国も照り輝いた。天照大御神は、八百万の神々と相談して、須佐之男命を追放することとした。また、天照大御神は、大気津比賣神に食物を乞いた。大気津比賣は、鼻口から尻より、種々の食物を取り出した。この汚らわしい仕草を見た、須佐之男命は、大気津比賣神を殺してしまう。殺された神の身に生れた物は、頭に蚕、二つの目に稲、二つの耳に粟、鼻に小豆、陰に麦、尻に大豆が生っていた。これらは、五穀と養蚕の原となった。

スサノオ（左）とクシナダヒメ像（日本最古の神社障壁画、八重垣神社：島根県松江市）
（出典：『古事記の原風景』）

出雲神楽：スサノオがヤマタノオロチの首を切る場面（島根県日御崎神社）
（出典：『古事記―日本の原風景を求めて―』）

追放された須佐之男命は、出雲国の斐伊川の上流に降った。この地で泣き悲しむ夫婦に出会う。毎年、八俣大蛇が来て、既に七人の娘を食べられたという。今年は、8人目の櫛名田比賣が提供されることになっていた。そこで、須佐之男命は、計略を回らして、比賣の姿に変身し、八門を作り、門毎に八桟敷を結い、その桟敷毎に酒船を置いて、八塩折の酒（強い酒）を用意させた。果たして、八俣大蛇が来て、八つの頭を使ってその酒を飲み、酔いつぶれた。その時、須佐之男命は、八俣大蛇を切り殺した。尾を切った時に、草薙の太刀が出てきた。須佐之男命は、出雲に出て「我が心すがすがし」とのりたまいて、須賀の宮を作った。その時に、「八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を」と歌った。櫛名田比賣を始め、多くの比賣を娶り、八十の子（八十神）を成した。その一人に大国主神（亦の名を大穴牟遅神などといい五つの名があった）があった。

この八俣大蛇は、斐伊川そのものを指し、下流は8つの（多くの）流れに分流されていた姿を表わしていた。この川の流れは、稲作の灌漑用水を供給する一方で、時に洪水を起す暴れ川であった。この物語は、櫛名田比賣（3）の名前が暗示するように、稲田の豊作を祝えるようにするため、須佐之男命がこの暴れ川を抑えたことを意味している。

大国主神は、唱歌「因幡の白兎」（稲羽の素兎）(4)にも歌われているように、小さな白兎が大きな鮫（さめ）と知恵比べをして、鮫を騙したものの、それがばれて裸にされてしまう。八十神に海水を浴びて、風に吹かれろといわれたが、かえって傷が大きくなった。そこに通りかかった大国主神は、真水でもって身体を洗い、蒲の穂の上で寝転べば治るといった。白兎は、そのようにして傷を治すことができた。大穴牟遅神（大国主神）は、八十神から迫害を受け、根の堅州国に逃れ、そこで、須佐之男命の女の須世理毘賣と結婚した。須佐之男命は、大穴牟遅神に次々に試練を与えるが、妻や鼠に助けられ克服して行く。そして、須佐之男命は、大国主神（国つ神）に国作りを命じ、その国を高天原を治める天照大御神（天つ神）に譲らせる。この国作り、国譲りについては、勢力を誇った出雲族（国つ神）が天皇族（天つ神）に屈服したことを表わしているという説が強い。

白兎海岸
（稲羽の白兎の舞台となった海岸：鳥取市）
（出典：『古事記を旅する』）

いよいよ天照大御神は、騒がしい豊葦原水穂国を平定するために、天孫降臨を日子番能邇邇藝命に命じる。邇邇藝命は、天宇受賣命ら5人の命を従え、八尺の勾玉、鏡、草薙釼を持って、竺紫の日向の高千穂の嶺に天降りした。この嶺については、南の霧島山（高千穂峰）とも宮崎県高千穂ともいわれている。邇邇藝命は、麗しき美人に合い、「誰が女ぞ」と問うと、女は「大山津見神の女、名は神阿多都比賣、亦の名は木花の佐久夜毘賣」と答えた。命は、木花の佐久夜毘賣と一夜婚したが、一夜で懐妊したことに天つ神の子（自分の子）であるかを疑った。毘賣は、国つ神の子なら産むこと幸くあらじ（無事ではない）、天つ神の御子ならば幸くあらんと言って、戸なき八尋殿を作って、その殿の内に入り、土を持ちて塗り塞ぎて、産む時に方りて、火をその殿に著けて産んだ。火の盛りに燃える時に生んだ子は火照命（海幸彦）、次に生んだ子は火須勢理命、次に生んだ子は火遠理命（山幸彦）であった。

兄の海幸彦（海人・漁夫）は海の幸を、弟の山幸彦（山人・猟人）は山の幸を得ていた。兄から一度仕事を変えてみたいという提案があり、弟はしぶしぶ従い、魚釣りをした時に釣り針を失ってしまった。弟は代わりの釣り針を一千本用意したが、兄は失った釣り針でなければ許せないという。困った弟は、泣きながら海辺をさまよっていた。その時、鹽椎神が通りかかり、事情を話したところ、綿津見神の宮殿に連れて行ってくれた。そこで、鯛ののどに刺さっていた釣り針を見つけてもらうとともに、綿津見神の女、豊玉毘賣と懇ろになり、子を儲けた。毘賣は出産に当って、天つ神の子は海原ではなく、海辺で生むべきであると、鵜の羽を葺草にして産殿を造った。にわかに産気づき、産殿に入る時、山幸彦に産む姿を見るなと言った。山幸彦は、その言を奇しと思い、垣間見てしまう。すると、その姿は八尋鮫に化して、うねりくねっていた。見られた毘賣は恥ずかしく思って、海原に帰っていった。その子の名前を、天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命といった。しかし、その命の養育のために、豊玉毘賣の妹、玉依毘賣が送られた。この命は、叔母・玉依毘賣との間に、四柱の命を儲けた。その一人が、神倭伊波禮毘古命といい、初代天皇の神武天皇である。

鵜戸神社
（トヨタマヒメがウガヤフキアヘズを産んだといわれる）
（宮崎県日南市）
（出典：『古事記の原風景』）

このように、神話とはいえ、天皇家の系譜には、「海」「水」の血が色濃く反映している。また、ここには、古代ギリシャ人・タレース（前7世紀後半～前6世紀中頃）が「水だ！」と叫び、万物の根源は水であると主張し、これによって人間は海から発生し、陸上に這い上がった生物であるとの説の拠りどころとなったことに通じている。現に、人間の体内の羊水の成分は、海の成分とほぼ同じであるといわれており、海の名残を留めている。東西の交流がなかった時代に、形式や表現は違うものの、同じような発想を共通に抱いていたことは、同じ人間としての本性なのかも知れない。

さらに、日本列島は「豊葦原水穂国」といい、水田稲作の豊凶に関わる「水」の存在が大きかったことを示している。このことから、天皇家は、この「水」に深く関わる系譜を持つことによって、権威者としての地位を確立していったという見方がなされている。

人間も「現（うつ）しき青人草」といわれるように、葦原水穂の国を象徴する青々とした草のような存在であり、同時に草のように青々と生々し、やがて枯れて土に帰り、再び芽生えるという再生・循環・輪廻（りんね）の思想が底流として横たわっている。

（注）
（1）これは男尊女卑の表れというが、古代には求婚は男がするもの、その返事という最終決定は女がするものという風習であったことを反映しているという説がある。
（2）覗いてはいけないといわれる程覗きたいのが、人間の性であり、同じ『古事記』の「山幸彦・海幸彦の物語」にもあるし、民話の『鶴の恩返し』の話にも通じている。
（3）櫛は霊妙の意であり、古くから女神が指櫛を川にさして水を田に引いたという伝承がある。名田（なだ）は稲田の意である。
（4）実際の唱歌の名前は、「大黒さま」（石原和三郎作詞、田村虎蔵作曲）―『尋常小学唱歌（二ノ中）』（明治38年12月）である。ここでは、大黒さま＝大国主命となっている。

（引用・参考文献）
・倉野憲司校注：『古事記』、岩波文庫（１９６３）
・西郷信綱著：『古事記の世界』、岩波新書（１９６７）
・荻原浅男：『古事記への旅』、ＮＨＫブックス（１９７９）
・三浦佑之訳・注釈：『口語訳古事記』、文芸春秋社（２００２）
・文・伊藤ユキ子／写真・古川誠・牧野貞之：『古事記の原風景』、学習研究社（２００４）
・三浦佑之：『古事記を旅する』、文芸春秋社（２００７）
・『古事記―日本の原風景を求めて―』芸術新潮創刊７５０号記念大特集（２０１２・６）

（おおはしきんじ・東京農業大学客員教授）